

令和5年度 京都府立与謝の海支援学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）実施段階

学校経営方針（中期経営目標）	本年度学校経営の重点目標（短期目標）	本年度の成果と課題
<p>◇一人一人の教育的ニーズに応じた適切な教育課程づくりを進める。（12年間を見通しながら）</p> <p>◇自立と社会参加する力を育てるために、基礎学力の充実に努めるとともに進路指導の充実に図り、希望進路の実現を目指す。</p> <p>◇安心・安全な学校環境の整備を行う。</p> <p>◇地域における特別支援教育のセンター的役割の推進に努めるとともに、教育、医療、保健、労働、福祉等の関係機関、家庭及び地域社会との連携を行う。</p> <p>◇専門性の向上に向けて研修を充実させ、指導内容や指導方法の工夫改善を行う。</p> <p>◇教育財産の継承に努め、「与謝の海の教育」の発展・向上を図る。</p>	<p>◆12年間の系統性を踏まえ、児童生徒の能力や可能性を最大限に引き出し、自立と社会参加の力を育てる教育課程の編成と授業づくりの実践をさらに進める。</p> <p>◆よりよい評価の在り方を引き続き検討するとともに、個別の指導計画が指導や支援にさらに生かせるようにする。</p> <p>◆子どもたちが地域で生きていく力を育むため、地域学習の研究と授業実践をさらに進める。</p> <p>◆本校が継続して取り組んできた進路指導を更に充実発展させ、一人一人の希望進路の実現を目指す取組を継続して行う。</p> <p>◆従来から取り組んできた校内の防災対策や安全・防災教育をさらに充実させるとともに、中長期的視野に立って見直しと改善を図る。</p> <p>◆関係機関との連携を密にして、地域のセンター的機能をさらに発揮し、乳幼児期から社会参加までの切れ目のない支援に継続して取り組む。</p> <p>◆多様な障害に対応する学習環境づくりのために、教職員の専門性や資質を高める組織的な取組を継続して行う。</p> <p>◆各部長のマネジメントのもと、より効率的な学校運営を目指すとともに、教育活動全般のさらなる改善を図る。</p> <p>◆ホームページ等や関係機関との連携を通して積極的に広報活動を行い、本校の教育活動が伝わるように工夫をすることで効果的な発信にさらに努める。</p> <p>◆働き方改革に係る、業務の改善を図る。</p> <p>◆コンプライアンスに係る意識を高め、引き続き府民の信頼を得られるように努める。</p>	<p>○12年間の系統的を踏まえた教育課程の編成と実施に効果的に取り組めるよう学習内容の「見える化」に着手するとともに、各学部においてそれぞれの教育課題に応じて効果的に授業実践を進めることができた。</p> <p>○個別の指導計画について、保護者と目標と評価を共有する手段とするなど、引き続き活用することができた。</p> <p>○昨年度の研究と実践の成果を踏まえ、研究部を中心として引き続き全校で地域協働学習の実践に更に有効かつ具体的に取り組み、地域社会とつながりあう教育実践を深めることができた。</p> <p>○引き続き組織的なきめ細かな進路指導を進め、生徒の希望進路を実現することができた。学びの履歴やキャリアパスポートの活用を定着させ、12年間を見通したキャリア教育の視点をもって全学部において系統的な取組を行う必要がある。</p> <p>○避難訓練や不審者対応訓練を実施して、引き続き一定の成果をあげることができた。限定された範囲での引き渡し訓練等、新たな取組を行ったが今後さらに拡充し、中長期的展望をもった計画の策定を行う必要がある。</p> <p>○増加しつつある地域のニーズに応え、乳幼児期から社会参加までの切れ目のない継続した支援を充実させることができた。</p> <p>○研究部を中心に全校的な研究を進めることができた。総合教育センター等による参加型の研修に積極的に参加する教員が増えた。</p> <p>○各部長がマネジメント能力を発揮して組織運営を円滑に行うことができた。感染対策を緩和する中で充実した教育活動を追求しようとすることができた。</p> <p>○ホームページの改編が広報活動の見直しを行うきっかけとなり、従来より充実した広報活動を展開することができた。今後更に効果的な発信に努める必要がある。</p> <p>○衛生委員会の取組により教職員の業務改善の意識が向上した。また、学部等各部署において業務の効率化が具体的に図られた。</p> <p>○コンプライアンスに係る調査を実施して経年比較を行い、教職員の実態に応じた研修を行い意識の向上を図った。今後も継続して取り組む必要がある。</p>

評価領域	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
小学部	一人一人のニーズや発達段階、障害等に応じた学習や支援の充実、授業改善を進めるとともに、教育課程の検証・改善を図る。	・生活年齢や発達段階、12年間の系統性を視点に学習内容を整理し、授業実践を通してより一人一人の教育的ニーズに応じた教育課程づくりを行う。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・適宜学びの履歴を確認し生活年齢や発達段階、系統性、ニーズ等、児童にとって学習が積み上がる教育課程づくりを行った。 ・将来の子どもの姿を見据え育みたい力を考えながら指導・支援を続けた。また、日々の授業や子どもの様子を担任間で共有し反省を繰り返し指導・支援の改善や授業改善につなげた。 ・地域協働学習は地域に出て学習したり地域からゲストティーチャーを招いたりして子どもたちが主体的、意欲的に学ぶことができた。学習を通して地域を知ったり地域に知ってもらったりすることにつながった。 ・学部内研修として教科学習、子どもの見方、ICTの活用、教材紹介等の研修を実施し、学部内ニーズに応じた学びができた。 ・担任団で児童の情報共有や支援の見直しを日常的に行い、共通意識をもって指導にあたった。 ・自立活動専任とは児童のアセスメント、授業づくり、保護者支援、ケース会議等で密に連携できた。 ・学びが家庭で生かされるよう、家庭と連携して支援を検討した。保護者懇談会を実施し、保護者同士がつながり情報交換できる機会がもてた。ケースによりSCやSSWを活用し家庭支援を行った。 ・医療、放課後支援事業所、地域協働取組で訪問した機関等、新たに多くの関係機関と連携できた。 ・HPの活用が増えた。見直しを図りながら進め、全学級の学校の様子を発信することができた。 ・月案をもとに長期的な見通しで授業計画を立案し、見直しをもって実践することができた。 ・指導者体制で急な対応が必要になった際は学部内で可能な限り整えたり、自立活動部の協力を得たりして対応した。 ・学級内で任務の分担を配慮しあって業務を進めることに努めた。 ・会議では原案提案を原則とし時間短縮に努めた。今後も会議内容の精選を行い教材研究の時間を生み出していく。指導案や、研修・会議資料等はアプリを活用して情報共有したり各種総括をアンケート集約アプリで行ったりするなど効率的に業務が進められた。 	
		・適切なアセスメントと各教科等のねらいを踏まえた個別の指導計画を作成するとともに、評価を通して教育課程の改善や授業改善を図る。	B			
		・ICTを効果的に利活用した学習や、地域とつながりあう学習など、児童にとって意欲が高まる授業作りを行う。	A			
		・発達、障害、指導方法等、専門性の向上を目指した研修と学び合いを充実させる。	A			
	児童を中心に据えて指導者間、保護者、地域、関係機関との連携・協力を図る。	・指導者間で連携し、からだづくり、基本的な生活習慣や挨拶、ルールやマナーを守る、コミュニケーションの土台となる力の確立など、学校生活全般を通して共通意識をもって指導する。	B	B		
		・自立活動専任指導者と日常的に連携し、児童の実態や課題を適切にとらえ、障害特性に応じた指導、支援の在り方、評価の検討等を行う。	A			
		・保護者との連携を深め、生活に生きる支援を考える。	B			
		・地域や関係機関等多様な人とつながり、豊かな生活につながる連携を行う。	A			
	組織的、計画的に業務を遂行する。	・年間、学期、月を見通した計画的な授業実践を行う。	B	B		
		・組織的、計画的、協働的に業務を進める。	B			
		・会議、時間、文書、環境、業務内容等の精選を行う。	B			

評価領域	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題	
中学部	個々の障害に視点をあて、キャリア教育の視点を持ち、系統性のある教育課程作りを行うとともに、主体性、思考力を育む授業作りを進める。	・系統性、横断的な視点を踏まえて、生徒が「分かる、学びがい」を実感し、「主体性、思考力」を育む学習を進める。(ICT機器も効果的に活用)	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・体験的な学習など、他の教科等と結びつけて学習したり、教科担当者間で学習内容を関連付けたりしながら横断的な学習が進んだ。 ・ICT機器の活用が進み、分かりやすさや意欲的に学ぶための視点を持ち効果的に活用した。 ・地域協働学習が進み、外部講師から学ぶ授業や地域の方を招く授業を通して、生徒自身が学習の価値を感じ、相手も同様に意義を感じる学習ができた。 ・学部研究で、地域資源の活用に向けて職員研修を行い、実践につなげることができた。 ・行事や学年別の取組を通して、リーダーが役割を果たし、学部全体で取組などを成功させようとする個と集団の育ちが見られた。 ・個別の指導計画の作成を個別懇談会で保護者と目標を共有し実践することができた。評価など保護者に丁寧な返しをしていきたい。 		
		・地域を題材にした学習や交流等の学習をとおして、人とつながる経験を積むとともに、双方が学びのある授業づくりを進める。	A				
		・集団活動が組織的にできるようにし、集団と個の育ちを大切に、自信や自己肯定感を育てる取組を進める。	A				
		・アセスメントに基づく個別の指導計画の目標と評価を保護者と共有しながら、生活年齢を踏まえ段階的な指導を進めていく。	B				
	保護者や関係機関との連携を密にし、より適切な支援を進める。	・保護者と課題を共有して指導を進めるとともに、学習の様子が家庭に届く発信に努める。	B	B		<ul style="list-style-type: none"> ・保護者参観日に、展示物の見学や授業に参加できる機会を設定し、学習の成果や成長の様子を知ってもらうことができた。 ・自立活動部や保健室、寄宿舎とも連携し、効果的な支援や日常の情報共有を行い指導に生かすことができた。 ・教育機関や行政機関、また医療やカウンセラー等と連携し、ケースに応じて保護者の相談に応じたり、生徒指導に生かしたりできた。 	
		・校内の各分掌、自立活動、寄宿舎、養護教諭等、組織的な連携を図り、生徒の実態について共通理解のもと、障害特性に応じた指導・支援を充実させる。	B				
		・関係機関と連携、情報を共有し、共同した対応を行う(教育機関、福祉行政、医療、放課後等支援事業所など)。	B				
	働き方を考え、組織的で効率的な学部運営を進める。	・組織的な学部運営と対応を行い、スムーズな運営と組織力の向上を図る。	B	B			<ul style="list-style-type: none"> ・各分掌の長や行事等の担当者の主体的な提案のもと、スムーズな学部運営ができた。 ・日頃から生徒の様子を教員間で話すことで、会議の精選になり、時間を有効に使えた。 ・教員のタブレット端末支給により、会議資料のデジタル化が進み、手軽に会議ができた。 ・職員数に対して一人の仕事量が多く、また、全校的な任務も重なり一部偏りがみられた。学部内でも配慮できるようにしたい。 ・指導体制が整わない時は、学級を越えて協力し合えた。任務量の片寄りや心身の負担が生じないよう学部運営に努めたい。
		・学部の提案事項は計画的に、資料は事前配布、各会議等は効率よく設定する。	A				
		・仕事量の平準化、相互に協力し合い、健康で充実した働き方の工夫や配慮を行う。	B				

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
高等部	<p>発達段階や障害等一人一人の教育的ニーズを把握し、卒業後に生きる力を育む視点を大切にした授業づくりを進めるとともに、教育課程の検証、改善を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 学習指導要領に基づき、12年間の系統性や卒業後の生活や就労を見据えたつながりのある教育課程を編成、実施するとともに、学習評価を基に指導目標や指導内容、必要時数等、更なる改善を図る。 	A	A	<ul style="list-style-type: none"> 教育課程について、昨年度からの検討課題を中心に、午後の授業開始時刻の変更や総合的な探究の時間の単元計画の見直しなど、組織的、計画的に検討を進め改善を図ることができた。引き続き検討、改善を進める。 職業教育においては、「ものづくり」を中心しつつも引き続き新たな実践を模索することができた。販売会や企業連携などをとおして地域の方から評価をいただき更なる意欲へつながった。また、栽培から製品までを地域の職人から教わるなどして、より良い製品づくりを進めた。 単元配列表にそって計画的に学習を進めた。また、防災や成年年齢引き下げに関する学習も各教科の中で学習を進めることができた。 話し合い活動やペア活動、学んだことを振り返る時間の充実、設問や課題設定の工夫などにより学びを深める工夫を行った。 地域を知る、つながる学習から双方向型の地域と協働した取組まで、生徒の実態に合わせて地域資源を活用した学習を進めた。赤ちゃん触れ合い体験や与謝の海サロンなど、地域の方との充実した時間は本校生徒の理解へとつながった。ホームページ発信などにも力を入れた。 タブレット端末の家庭学習における活用、書字に困難を抱える生徒の活用などが進んだ。重度生徒の端末活用については課題が残るが、舞鶴高等専門学校との連携などにより、生徒の実態に応じた機器活用が進みつつある。 チーム別などの全校取組は、生徒が自ら下学年の友だちのことを考えて取組を企画でき良い機会となった。しかし、生徒の実態やコロナ禍の影響などもあり、リーダー性の育成には課題が残った。 他者を理解したり生徒同士で課題解決したりする力を高めるため、友だちの良いところを見つける取組を取り入れたり、話し合いの機会を多く設定したりするなど工夫することができた。 不登校傾向生徒や重度障害のある生徒対応などをとおして、一人一人を理解し、生徒に応じた対応を組織的に行うことを大切にすることができた。 深い生徒理解のもと対応にあたるため、学部ケース会議を実施し複数の視点で指導方針を立てる、自立活動部との連携や医療との連携を図るなどして組織的かつ多面的に指導を進めた。 電話連絡や懇談等とおして保護者との連携を丁寧に進めた。しかし、社会の変化に応じた卒業後
		<ul style="list-style-type: none"> 地域資源を活用し、生徒と地域社会、双方にとって意義ある双方向型の授業づくりを行う。 	A		
		<ul style="list-style-type: none"> 授業等におけるICT機器の活用について、一人一人の可能性を伸ばす視点を持ち、興味関心、実態等に応じた効果的な活用を進める。 	A		
		<ul style="list-style-type: none"> 学校生活の充実・向上につながる取組を進め、課題を解決する経験をとおして自己や他者への理解を深め、自分で考え行動する主体性やリーダー性の育成を図る。 	B		
		<ul style="list-style-type: none"> 個別の指導計画の作成・活用について更なる改善を図り、一人一人の教育的ニーズに応じた妥当性・信頼性のある指導の充実を図る。 	B		
	<p>指導者間や保護者、関係機関等との丁寧な連携を図り、卒業後の社会生活に向けた指導や支援の充実を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の成長や変化への気付きを大切に、保護者と丁寧に連携するとともに、ケース会議等とおして関係機関との連携を図り、卒業後の社会生活に向けた支援の更なる充実を図る。 	B	B	
		<ul style="list-style-type: none"> 学部内外において指導者間の連携を密にし、組織的に課題や指導方針について検討し、適切な指導や支援を行う。 	B		
<ul style="list-style-type: none"> 自立活動部や外部の専門家と連携したり研修の機会を設けたりして専門性を高め、生徒の実態を的確に把握した上で指導目標を設定し、更なる指導・支 		B			

	希望進路の実現と定着支援の充実を図る。	援の充実を図る。			<p>の家庭や地域での生活を共に想像し、目標と課題を更に丁寧に共有していく必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> 他職種職員との情報共有など、連携を大切にしてきたが課題が残る。作業学習は指導者が通年で担当する等して専門性の向上を図っているが、次世代の育成も見据え、実習助手との更なる連携を図ることが必要である。 日常的に卒業後の生活や就労を意識して指導を進めた。また、進路指導専任と常に情報を共有しつつ指導を進めることができた。 時代とともに重度生徒の進路先の状況などは変化してきており、一人一人の進路状況について全体像がつかめるような情報共有に課題が残った。 2年生から希望に合った企業実習を進めた。このことにより、多くの就労体験ができ生徒の意識向上につながった。 就労後の環境の変化により困難さや不安を感じている卒業生へのアフターケアを関係機関とともに行うなど、進路指導専任が中心となり卒業後の支援にも力を注いだ。 年度当初に仕事量が偏らないように丁寧に分担を進めたが、その後に様々な役割が重なることもあり課題が残った。 作成文書の精選や更なる会議設定の見直し、朝会議の有効活用などを進めた。効率的に情報共有を進めるために更なる改善が必要である。 教育課程別グループ毎に、効率よく運営を進めることができた。また、互いの様子を思い合い、助け合って仕事を進めることができた。
		・発達段階ごとに「進路目標」を設定し、希望進路の実現に向け、進路指導専任が中心となりつつ、高等部全体で組織的に進路指導を進める。	A	B	
		・関係機関との連携を深め、社会の変化や地域の実情、多様な教育的ニーズを踏まえた進路指導の充実を図る。	B		
	・職場実習、企業就労等につながる職場・職域開拓に努めるとともに、関係機関と連携し、職場定着支援を強化する。	B			
	学部運営の効率化を図る。	・学部組織や見えにくい業務の可視化を更に進め、役割を明確にしたり情報共有の仕方を工夫したりして、円滑に連携・協働できる体制づくりを進める。	B	B	
		・会議設定や行事・取組に係る準備期間の見直し、作成文書の精選等、業務改善を更に進める。	B		
・学部全体運営とのつながりを明確にしつつ、専門部や教育課程別グループによる運営を強化し、効率的に業務を進めるとともに実務をとおして業務や実践をつなぐ。		B			

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
地域支援会議	地域の課題やニーズを把握し、困り感に寄り添い、他機関と連携した相談活動を行う中で、互いの支援力の向上をめざす。	・管内巡回相談員や関係機関とともに巡回教育相談を行ったり連携を行ったりし、地域の支援力の向上を図る。(通級指導教室担当・保健師・作業療法士・地域の相談員、福祉、丹後圏域リハビリテーションセンター等)。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の通級指導担当者や、保健師、作業療法士等と連携し、計画的・継続的に相談活動を行うことで切れ目ない支援に努めた。 ・ケースによっては継続的な相談活動を行い、個人や集団の育ちを確認し、今後の支援や就学・進路に向けての取組などについて話し合うことができた。早期に継続した相談を行うことで、本校への就学につながったケースもある。 ・北部のセンター共催で地域開放講座を実施した。リモート開催ということもあり本校及び地域の学校から多数の参加があり、地域の支援力向上につながった。 ・地域特別支援連携協議会を実施し、「働く」視点で関係機関と協議できた。協議会の内容や交流で出た意見等を掲載した便りを発行した。 ・高等学校においては新規の相談が増え、相談内容も多岐に渡った。その都度ニーズに寄り添いながら対応した。中学校では1, 2年時から巡回や来校相談を行い早い段階から取組を進めるケースが増えた。 ・各市町自立支援協議会に分担して参加できた。必要に応じて共有した。 ・相談依頼内容に応じて積極的に自立活動専任指導者が相談活動に加わることができた。
	計画的、継続的な相談活動や研修会等を通して、個人や集団の育ちを確かめ合いながら、園・校の支援力の向上をめざす。	・特に困難なケースには計画的に複数回相談を行うことを検討しながら進める。	B	B	
		・北部地域を対象とした地域開放講座の開催やニーズに応じた研修会等を実施し、地域のアセスメント力、支援力を高める。	B		
	各関係機関との連携を密にしながら、乳幼児期から社会参加までの切れ目のない継続した支援やネットワークづくりを進め、本人の実態に合った進路選択につながる支援を進める。	<ul style="list-style-type: none"> ・早期からの相談を大切にし、本人の実態に合った進路選択に向けて働きかけをする。 ・各市町の自立支援協議会等に参加し、情報を共有しながら支援を進める。 	A	B	
地域の相談支援に対応できる人材の育成に努める。	・自立活動専任が積極的に相談活動に加わる。	B	B		

学校関係者 評価委員会 による評価	<ul style="list-style-type: none"> ・12年間を見通した教育課程が分かりやすく示されており、それに基づいて展開される教育活動も充実している。 ・地域との協働による取組が活発に展開されており、地域に根差した学校づくりの成果が見られる。 ・今後も現在までの取組の成果に基づいて、更に発展的な教育活動の展開を期待する。
-------------------------	--

次年度に向けた改善の 方向性	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度までの取組の成果を踏まえ、12年間を見通した教育課程の編成と実施を更に充実させる。 ・地域協働学習の研究と実践を更に充実・発展させる。
-------------------	--